

初期新高ドイツ語民衆本 „Dil Ulenspiegel(1515)“ の語法について

——現代ドイツ語訳との比較——

大 島 浩 英

Zur Sprache des frühneuhochdeutschen Volksbuches „Dil Ulenspiegel(1515)“

——Verglichen mit der Übertragung ins Neuhochdeutsche——

OSHIMA Hirohide

I. はじめに

中高ドイツ語から新高ドイツ語へと移りゆくその過渡期の言語状況として、14世紀半ばから17世紀半ばまでの時期の言語を初期新高ドイツ語と設定されてはいるが、この時期のドイツ語に明確で合理性のある言語上の諸規則を見い出すのは必ずしも容易なことではない。そして、書記法、音韻、文法など様々な分野において不統一が見られるこういった言語状況下で Volksbuch（民衆本）と呼ばれる文献 „Ein kurtzweilig Lesen von Dil Ulenspiegel（ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら¹⁾）“ は成立した。本稿では、当時の庶民層に広く読まれたとされているこの民衆本を初期新高ドイツ語の一例として取り上げ、その中で、主人公 Dil Ulenspiegel の誕生から成人、そして遍歴の旅に出ていたずらを繰り返すようになるまでの Vorrede（前書き）～Die 27. Histori（第27話）について、これを現代ドイツ語訳と比較しながら、その語法上の問題点を指摘して行きたいと思う。なお、原文から引用した語句や文にはその書記法にかなりの不統一が見られるが、すべてオリジナルのまま引用した。また、例文中の下線及び [] 内はすべて筆者によるものであり、イタリックの文は現代語訳である。

II. 語の形態と意味

ここではまず語の音韻面に関して、現代語と比べて幹母音に大きな違いが見られる動詞から見て行くことにする。

Das treib er so lang, [...] (S.24)

Das trieb er so lange, [...] (S.40)

Also greiff Ulenspiegel uß dem Stock und greiff den Fordersten bei dem Har
[...] (S.28)

Da griff Eulenspiegel aus dem Korb dem Vorderen ins Haar [...] (S.42)

[...] und [einer] wißt nit, wa der ander beleib, [...] (S.29)

[...], und der eine wußte nicht, wo der andere blieb. (S.43)

[...] und wie er sein Pferd uffschneid [...] (S.73)

[...] und wie er sein Pferd aufschnitt [...] (S.78)

これらの例文に見られる動詞 *treiben*, *greifen*, *bleiben*, *aufschneiden* の過去形は現代語においてはそれぞれ *trieb*, *griff*, *blieb*, *schnitt auf* というようにその幹母音が *ei* から *ie* あるいは *i* へと変化する強変化動詞なのだが、この文献においては文例に見られるように単数過去形においても *ei* を残している。また *schneiden* では、

[...] und [er] schnit ihm bald den Bauch uff [...] (S.74)

[...] und [er] schnitt ihm rasch den Bauch auf. (S.79)

このように *ei* → *i* という現代語と同様の変化を示している例も見られる。さらに、*„da luffen sie hinzu (S.41)“* や *„und [der] lieff zu der Kirchen hinauß (S.41)“* といった例では *laufen* の過去形として *luffen* や現代語と同じ幹母音をもつ *lieff* などの形態も現れており、音韻面に揺れが生じている²⁾。また幹母音の変化に関しては次のような例も見られる。

Da nun Ulenspiegel nach seinem Anlaß ruffte, [...] (S.54)

Als Eulenspiegel nach seiner Ankündigung rief, [...] (S.233)

[Ulenspiegel] rufft dem andern und sprach: [...] (S.72)

[er] rief den anderen und sprach: [...] (S.78)

ここでの *rufen* は過去形で用いられているのだが、その形態は *ruffte* あるいは語末音 *e* が消失した *rufft* という形で現れており、現代語の *rief* のように強変化をせず語尾に *te* を付け規則変化動詞として変化している。このように強変化動詞が規則変化動詞のように変化することに関連して、

[...] unnd [der] ließe ihn fordern zu dem Greuenstein. (S.44)

[...] und [der] ließ ihn nach Schloß Giebichenstein kommen. (S.60)

[...] unnd [Ulenspiegel] bote den Löffel dem Schlackßnarren unnd sprach:
[...] (S.72)

Dann bot er den Löffel dem Schalksnarren und sprach: [...] (S.78)

これらの文例の *ließe* や *bote* は、現代語の *ließ*(<lassen), *bot*(<bieten) とは違ってそれぞれ語尾に *e* をもっており、ここには規則変化動詞の過去形語尾 *-te* からの影響が見てとれる。

さて語末音の *e* については初期新高ドイツ語では語末音消失 (Apokope) と呼ばれる現象があるが、これは本稿で取り上げた文献にも頻繁に現れている。

Wenn er solte ein Eimer mit Wasser holen, so bracht er ihn halber fol, und wan er zwei Höltzer solt holen an daz Feur, so bracht er eins. (S.35)

Wenn er einen Eimer mit Wasser holen sollte, so brachte er ihn halb voll, und wenn er zwei Stücke Holz fürs Feuer holen sollte, so brachte er ein Stück. (S.54)

Das sagten dan die Siechen Ulenspiegel bei grossem Glouben zu. Daruff sagt er dann einem jetlichen bsunders: [...] (S.53)

Das schworen ihm dann die Siechen mit großer Beteuerung. Darauf sagte er zu jedem einzelnen: [...] (S.232)

Und da daz Spital nun gantz ler waz, da begert er seines Lons von dem Spittelmeister und sagt, er müst an ein ander End eilens. Da gab er ihm das Gelt zu grossem Danck. (S.54)

Als das Spital nun ganz leer und die Kranken alle heraus waren, begehrte Eulenspiegel von dem Spitalmeister seinen Lohn und sagte, er müsse eilig in eine andere Gegend reisen. Da gab er ihm das Geld mit großem Dank, [...] (S.233)

これらの文例はいずれも全体が過去時制で書かれており、原文で下線を施した語にはすべて語末音の *e* が消失しているのだが、最初の例文では現代語において *brachte* となる *bringen* の過去形が *bracht* のように語末の *e* が脱落した形で表示されている。この場合、語末の *e* がなくても *bringen* が強変化動詞であるため幹母音の *a* によって過去形であることがわかるが、その他の例文に見られるような *sagt*, *begert* といった規則変化動詞の場合、この語形のみからでは三人称単数現在時制の人称変化形と区別することができない。このような過去形と現在形との混同を避けるため、過去形の代わりに完了形という複合時制が特に南ドイツを中心に発達してきたとする考えもある³⁾。

また動詞の現在人称変化形では、*„ich gang(=ich gehe)“*, *„ich sih(=ich sehe)“*,

„ich sprich(=ich spreche)“, „sie sicht(=sie sieht)“, „Ihr sehent(=Ihr seht)“, „Ihr hon(=Ihr habt)“, „Ihr seind(=Ihr seid)“, „sie seint(=sie sind)“ などがあり、命令形では „Gang(=Geh) an Galgen(S.61)“, „thon(=tut) Euwer ander Aug auch uff(S.34)“, „Thund(=Tut) auff Euwere beide Augen.(S.34)“ といった用例が見られる。

次に、現代語と比べた場合その意味内容にずれが生じていると思われる語を見てみると、

Da nun Ulenspiegel für das Grab kam mit seinen Buren, [...] (S.40)

Als Eulenspiegel mit seinen zwei Bauern vor das Grab kam [...] (S.57)

この文例では前置詞 für が vor の意味で用いられている。これらはどちらも語源的には同根の語であるが、*„vor zehn Schilling(S.22)“* のように今度は vor が für の意味で用いられる場合もありまた、*„für einen Schilling Pfenning(S.76)“* という例では現代語と同じ形態と意味で用いられている。従って両者の意味の違いは文脈から判断するしかない。また動詞に関しては、*„ich setz in meinem Land (S.76)“* のように自動詞sitzenと他動詞setzenが混同して用いられたり、名詞については、*„Den nam er uff den Halß(S.61)“* に対して現代語では *„auf die Schulter“* となり、Halß「首」が Schulter「肩」の意味で用いられている。

„[...] Es ist besser, das dich die Rapen fressen, dann das sie mich hätten gessen“, [...] (S.74)

„[...] Es ist besser, daß dich die Raben fressen, als daß sie mich gefressen hätten.“ [...] (S.80)

また、ここでは同じ主語 die Rapen(=Raben)「カラス」に対して fressen「(動物が) 食べる」、essen「(人が) 食べる」の両方が使用されており、語義の区別が明確であるとは言えない。

次に前綴り動詞に目を向けてみると、

Dann da ist die Gewonheit, daz man die Kinder nach der Töffe in daz Bierhuß trägt und sind frölich und vertrincken die Kinder also, [...] (S.10)

denn dort herrscht die Gewohnheit, daß man die Kinder nach der Taufe in das Bierhaus trägt, sie vertrinkt und fröhlich ist; [...] (S.30)

この例文では前綴り動詞 *vertrinken* が *die Kinder* を目的語にとり、「子どもの健康を願って酒を飲む⁴⁾」という *positiv* な意味で用いられているが、現代語で *vertrinken* は「金、時間などを酒を飲んで浪費する」、「憂さを晴らす」など主に *negativ* な意味に用いられるため、*ver-* のもつ *negativ* な意味合いとは異なった使い方がされている。

[...], daz er sich mit seiner Büberei nit wol ußbringen mocht. (S.77)

[...], daß er sich mit seinen Streichen nicht mehr ernähren konnte, [...]
(S.82)

[...], der mag mein Gemält nit wol sehen. (S.79)

[...], der kann mein Gemälde nicht sehen. (S.83)

例文中の *mocht*, *mag* は現代語ではそれぞれ *konnte*, *kann* と訳されているが、これは現代語の *vermögen* と同じ意味であり、*mögen* のもつ「可能」の意味は現代語においては前綴り *ver-* の付加により実現されている。

Ich wont, es wär ein Doctor in der Artzney, [...] (S.47)

Ich wähnte, es sei ein Doktor der Medizin, [...] (S.63)

Und [Eulenspiegel] verwonte die Lüt, wie er aber uff dem Seil wolt gon. (S.16)

[...] und [Ulenspiegel] zeigte den Leuten an, daß er abermals auf dem Seil gehen wolle. (S.34)

ここでは *wont* という基礎動詞と、これに *ver-* を付加した前綴り動詞 *verwonte* が用いられているのだがこれらを対比させてみると、*verwonte* という前綴り動詞は、基礎動詞 *wont* (= *wähnte*) の「信じ込む」という意味を、*ver-* を付加することによって「信じ込ませる (*einen glauben machen*)⁵⁾」という使役的な意味に変化させたものと考えられるのである。そしてこの *verwähnen* という語は現代語にはもはや見当たらず、*anzeigen* という別の表現がここでは用いられている⁶⁾。また前綴り *er-* に関しては、*erkennen* がこの文献では基礎動詞 *kennen* の形で現れることが多く、逆に *erben*, *henken* などは *er-* を付加した前綴り動詞 *ererbten*, *erhencken* といった形で現れている。

III. 格の用法

ここではまず動詞とその目的語との格関係について考えてみる。

[...], das wil ich dich offenbar beweisen. (S.13)

[...], *das will ich dir eindeutig beweisen.* (S.31)

この例で, *beweisen* の目的語として用いられている *dich* は現代語では *dir* となっている。これは *lehren* などと同様に, 本来「人」と「事物」の両方が4格であったものが, 現代の言語感覚の変化により「人」の3格が使用されるようになったものと考えられるが, これに対して,

Der rüfft ihm in sein Huß [...] (S.57)

Der rief ihn in sein Haus [...] (S.168)

という例文では *rufen* の目的語が「人」の3格 *ihm* で入っており, これは現代語では4格の *ihn* となり, *beweisen*, *lehren* とは逆に「人」が3格から4格へと変化したことになる。また,

[...] unnd [Ulenspiegel] lößt vil mer Geltz daruß, dan er den Bäcker⁷⁾ für den Deick het geben. (S.59)

[...] und [Eulenspiegel] löste viel mehr Geld daraus, als er dem Bäcker für den Teig gegeben hatte. (S.170)

この例文で文末の動詞 *geben* は, 現代語訳では「人」の3格目的語 *dem Bäcker* をとるのに対して, 原文では *den Bäcker* という4格目的語をとっている。このようにこの文献においては3格と4格の使い分けが必ずしも明確ではないように思われるのだが, こういったことは前置詞の格支配にも見られる。

Eulen und Merkatzen dienen mir nit uff meinen Laden.⁸⁾ (S.58)

Eulen und Merkatzen kann ich nicht gebrauchen in meinem Laden. (S.170)

この例では前置詞句 „*uff meinen Laden*“ の *uff*(=*auf*) は4格を支配しているが, この文章の場合, 前置詞 *uff* は方向性を示しておらず従って前置詞格目的語は3格の *meinem Laden* とするのが自然であり, 現代語訳でも „*in meinem Laden*“ となっている。さらに,

[...], *da stund Ulenspiegel hart neben ihm [...]* (S.62)

[...], stand Eulenspiegel dicht neben ihm [...] (S.173)

ここでも、前置詞 *neben* は方向ではなく場所を表しているため現代語訳では *neben ihm* のように 3 格の目的語をとっているのである。また、

[...] und [Ulenspiegel] legt den hollen Stein mit dem Treck zwischen die Wand und dem Doctor⁹⁾ uff das Betbret. (S.46)

Und er stellte den Topf mit dem Dreck zwischen die Wand und den Doktor auf die Bettkante. (S.61)

この例文中の前置詞 *zwischen* は *legen* と関係して方向を表しているため *zwischen* の後には二つとも 4 格の目的語がくるはずだが、一方は 4 格の *die Wand*、しかしもう一方では 3 格の *dem Doctor* となっており、格支配が不安定である。

以上のような例は、当時の印刷事情を考慮に入れると誤植という可能性も十分考えられるが、それにしてもこういった誤植の一因として、この時代にはまだ格関係の明確な区別が確立していなかったということが言えるのではないだろうか。

さて次に、3 格目的語と 1 格主語との関係について考えてみる。

An dem andern Tag, da der Man ußgieng, so begegnet ihm Ulenspiegel, fragt ihn und sprach: „Lieber Ulenspiegel, wann wilt du zu mir kumen uff daz Weckbrot?“ (S.25)

Als der Hauswirt am nächsten Tage ausging, begegnete er Eulenspiegel und fragte: „Lieber Eulenspiegel, wann willst du wieder zum Weckbrot zu mir kommen?“ (S.40)

この文章で、*begegnet* の主語は 1 格の *Ulenspiegel*、3 格目的語は *ihn* つまりこの場合 *der Man* となり、そしてこれに続く文章 „fragt ihn und sprach“ の主語には前文の 1 格主語 *Ulenspiegel* が省略されているものと考えられるが、その後に続く発話内容から *fragt* の主語は前文で 3 格の目的語だった *ihn* つまり *der Man* となり、*fragt* の 4 格目的語 *ihn* は *Ulenspiegel* であることがわかる。現代語訳ではこの関係を、*begegnen* の 1 格主語を *der Hauswirt*、3 格目的語を *Eulenspiegel* とし、主語と目的語を入れ替えることによって明確に表現しているが、このことから言えるのは、*begegnen* という動詞の場合、文法上は 3 格の目的語と整理されている語が実際には 1 格の主語のように意識されているのではないかということである¹⁰⁾。これと同様のことは次の例文でも言える。

Es begab sich uff ein Zeit, daz er wolt reiten durch daz Lünenburg. Da bekam ihm

der Hertzog. Und da er sach, daz es der Hertzog was, da gedacht er: [...] (S.73)
Einmal begab es sich, daß Eulenspiegel durch das Lüneburger Land ritt. Da begegnete ihm der Herzog. Als Eulenspiegel sah, daß es der Herzog war, dachte er:
[...] (S.78)

ここで bekam (<bekommen) は begegnen と同じ意味で用いられているが、原文で下線を施した各文の主語は er (=Ulenspiegel) であり、そしてこの er を主語としてここに挙げた引用文全体が語られているものと思われる。そうすると引用文中の „Da bekam ihm der Hertzog“ についても、文法上は 1 格の der Hertzog が主語になるが、実際には 3 格目的語 ihm の方が他の文と同様により強く 1 格の主語と感じられているのではないだろうか。

また, begegnen と同様に 3 格目的語をとる動詞 gefallen についての例を見てみると,

Und dem Bischoff gefiel Ulenspiegels Schwänck gantz wol unnd gab ihm Cleider und Gelt. (S.44)
Dem Bischof gefielen Eulenspiegels Schwänke sehr, und er gab ihm Kleider und Geld. (S.60)

ここで gefiel (<gefallen) の 1 格主語は Ulenspiegels Schwänck, 3 格目的語は dem Bischoff であると文法上は理解されるが、しかし 1 格主語の Ulenspiegels Schwänck は複数名詞であるにもかかわらず動詞 gefiel が 3 人称複数の人称変化をしていない。つまりこの場合、文法的には目的語とされている 3 格の dem Bischoff の方がむしろ主語と感じられており、それ故に 1 格主語としての Bischoff との整合性を得るため gefiel が 3 人称単数の人称変化をしたものと考えられるのである。

IV. 動作と状態の表現

ここではまず、状態の変化を表す動詞 werden の使われ方について見てみることにする。

[...] und [der] ward ihm fluchen. (S.28)
[...], und er begann, ihm zu beschimpfen. (S.42)
Da ward der Bischoff und alle Hoflüt ser lachen [...] (S.47)
Da begannen der Bischof und alle Hofleute sehr zu lachen [...] (S.63)

現代語においては不定詞と共に用いられた werden は未来の助動詞と見なされるが、これが上記の例文では「～し始める」という起動相を表すものとして用いられており、またこれと同じ働きは „werden+現在分詞“ にも見られ¹¹⁾、このように werden には、ある状態への移行を表すという働きが認められるのだが、それではこの werden と、状態を示す sein との関係を見てみると次のようになる。

Der Bäcker waz ein schimpfig Mann und waz zornig und sprach in Spot: [...] (S.58)

Der Bäcker war ein leicht erregbarer Mann, er wurde zornig und sagte im Spott: [...] (S.169)

Ulenspiegel wandert in dem Land umb und kam geen Ulsen in daz Dorff. Da waz er aber ein Bäckrknecht. (S.60)

Eulenspiegel wanderte im Land umher, kam in das Dorf Uelzen und wurde dort wieder ein Bäckergeselle. (S.170)

これらの例で、原文ではいずれも sein によって zornig, Bäckerknecht という状態が表現されているのに対し、現代語ではこれを、その状態への変化という形でとらえている。

Die 25. Histori sagt, wie Ulenspiegel das Hertzogthum zu Lüneburg verboten waz [...] (S.73)

Die 25. Historie sagt, wie Eulenspiegel das Herzogtum Lüneburg verboten wurde [...] (S.78)

またこの例では、原文の状態受動が現代語では動作受動に改められており、ここでも状態への変化という把握がなされている。さらに、

Gang hi, sitz uff dein eigen Pferd, und so wil ich hinder dich sitzen [...] (S.13)

Geh hin, setz dich auf dein eigenes Pferd, und ich will mich hinter dich setzen [...] (S.31)

ここでは状態を表す sitzen と、動作・状態の変化を表す setzen がそれぞれ2回ずつ現れているが、原文の sitzen はいずれも現代語では setzen を用いた再帰表現に書き換えられ、状態と動作という見方の違いがここに見てとれる。ここで、原文の後半部分に目を向けてみると、„hinder dich sitzen“ つまり „hinter+4格“ という言い方がなされてい

ることから、この前置詞 „hinder“ には方向性の意味があることがわかり、こういった動作性は次のような例でも確認できる。

[...] und [er] lieff, oben uff das Tach ze sitzen, [...] (S.15)

[...], [er] lief oben auf das Dach und setzte sich dort hin, [...] (S.32)

[...] und [Ulenspiegel] saß da wider nider. (S.13)

[...] und [Eulenspiegel] setzte sich dann wieder. (S.31)

このような例から、sitzen「座っている」といった状態を表わす自動詞を用いながらも、実際にはその動作に意識が向けられているという現象があり得るように思われる。

さて次に、動作の継続を示す表現について見てみることにする。

Und giengen also zancken, [...] (S.29)

So gingen sie zankend [...] (S.43)

Da nun der Hertzog mit seinen Rütern reiten kam an die Stat, [...] (S.74)

Als der Herzog mit seinen Reitern an die Stelle geritten kam, [...] (S.79)

Als nun der Hertzog kam reiten, [...] (S.76)

Als der Herzog geritten kam, [...] (S.81)

これらの例文で、「口論する」、「馬に乗る」という動作の継続を表す動詞が原文では不定詞で示されているが、現代語では「口論する」という行為に対しては現在分詞が、そして「馬に乗る」という動作に対しては過去分詞がそれぞれ対応している。これは „geritten“ が運動を表す動詞（Bewegungsverb）で、reiten した後に kommen するという時間的なずれがあることからその過去分詞形が用いられたものであると思われ¹²⁾、初期新高ドイツ語においても „kommen+過去分詞“ が „kommen+不定詞“ より多く現れるという報告もなされているが¹³⁾、しかし現代語におけるような „kommen+現在分詞“ と „kommen+過去分詞“ との区別はこの文例には見られない¹⁴⁾。

V. おわりに

ここでは、これまで取り上げた言語現象以外の統語上の問題点についていくつか触れておくことにする。

主語と動詞の人称変化

Dann da ist die Gewonheit, daz man die Kinder nach der Töffe in daz Bierhuß

trägt und sind fröhlich und vertrincken die Kinder also, [...] (S.10)

denn dort herrscht die Gewohnheit, daß man die Kinder nach der Taufe in das Bierhaus trägt, sie vertrinkt und fröhlich ist; [...] (S.30)

この文章で, *daz* (=daß) 文内の主語は *man* であるため, *daz* (=daß) 文内のすべての動詞は現代語訳のように3人称単数の人称変化をするはずであるが, 原文では副文内後半の動詞が *sind*, *vertrincken* という変化をしており, このことからここでは不定代名詞 *man* が3人称複数の *sie* として扱われていることがわかる。

接続詞

Das wärt so lang mit ihm, bis das er ein wenig älter ward. (S.15)

Das währte so lange mit ihm, bis er ein wenig älter wurde. (S.32)

Wann ich wolt Euch gern etwaz geben, ee das Ihr schlaffen giengen, [...] (S.46)

Denn ich möchte Euch gern etwas geben, bevor Ihr schlafen geht, [...] (S.61)

[...], damit das ich wider starck würd. (S.67)

[...], damit ich wieder stark werde. (S.71)

ここでは従属接続詞 *das* (=daß) が, *bis das*, *ee das*, *damit das* というように他の従属接続詞と共に二重に用いられている。この場合の *das* は副文の内容を導いているだけの形式的な接続詞に過ぎず, それ自体に具体的な意味は含まれていないのだが, 現代語訳にはこういった *daß* の用法は見られない。

関係代名詞

[...], und ich bat dich doch, das du thun soltst alles, das sie gern sehe. (S.35)

[...] und ich bat dich doch, alles zu tun, was sie gern sieht. (S.54)

Ich hab doch nit so ubel gethon, daz doch Henckens wert ist. (S.74)

Ich habe doch nichts so Übles getan, was des Henkens wert wäre! (S.79)

20 Guldin und ein nūw Cleid, das wär fast gut. Ich wil darumb thun, das ich sunst ungern thät, [...] (S.72)

[...] : zwanzig Gulden und neue Kleidung, das ist schon sehr gut; ich will darum etwas machen, was ich ungern tue. (S.77)

これらの例のように *was* は, 現代語では先行詞なしで, あるいはまた *alles*, *Übles* などを受ける不定関係代名詞として用いられるが, 原文においては中性単数の定関係代名詞

das がこの was の役割を担っている。

比較

Und also badete er uß, so beste er möchte. (S.15)

Und also badete er aus, so gut er es vermochte. (S.34)

接続詞 so に伴う形容詞、副詞は現代語では gut のように原級で用いられるが、この文献ではそこに最上級の beste が用いられており、また別の例では、現代語の „der Vordere 「前にいる人」、 „der Hintere 「後ろにいる人」といった原級形容詞からの名詞に対して原文では、前後にいる一人ずつの人物を指して „Der Forderst“, „Der Hinderst“(S. 28) というように最上級が使用されるなど、ここでは比較表現の方法に現代語との違いが見られる。

否定

[...] und [Ulenspiegel] sucht ein End, da er frölich schlaffen möcht und ihm nieman nüt tät. (S.27)

Da suchte er einen Ort, wo er friedlich schlafen könne und ihm niemand etwas täte. (S.41)

この例では、「誰も彼に手出しをしない」という否定表現に対して nieman (=niemand) と nüt (=nichts) という二つの否定を表す語が重ねて用いられており、これは二重否定によって肯定の意味を表しているのではなく、否定の意味を強調する表現方法なのだが、これとは逆の現象が次の例に見られる。

Und niemant ist so weiß, er sol Thoren auch kennen. (S.48)

Niemand ist so weise, daß er nicht auch Toren kennen sollte. (S.64)

この例文には、「愚か者を知る必要がないほど賢い人間はいない」という二重否定の意味が含まれているのだが、これに対して原文では否定は一度しか行われていない。こういったことから、この文献における否定表現の論理性に不明瞭な点が見られる。

使用テキスト：Lindow, Wolfgang: Ein kurtzweilig Lesen von Dil Ulenspiegel. Nach dem Druck von 1515 mit 87 Holzschnitten. (Reclam 1687 [4]) Stuttgart 1966. (Durchgesehene und bibliographisch ergänzte Aus-

gabe 1978.)

現代語訳：Sichtermann, Siegfried H.: Hermann Bote. Ein kurzweiliges Buch von Till Eulenspiegel aus dem Lande Braunschweig. 2.Aufl. Frankfurt a.M. 1981. (insel taschenbuch 336)

注：

- 1) これは日本で一般的となっている邦訳タイトルであるが、原題は「ディル・ウーレンシュピーゲルの退屈しのぎの読み物」となる。
- 2) 子音においても, zoch (= zog), fahen (= fangen) などに子音交替が見られる。
- 3) Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S.389.
- 4) „Auf das Wohl des Kindes trinkt.“ Sichtermann, Siegfried H. : Hermann Bote. Ein kurzweiliges Buch von Till Eulenspiegel aus dem Lande Braunschweig. 2.Aufl. Frankfurt a.M. 1981. (insel taschenbuch 336) S.30.
- 5) Grimm, J. / Grimm, W. : Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv 5945) Bd.25. S.2073-2074.
- 6) ver- の作用に関連して次のような例も見られる。„[...] da verdingt er sich für einen Hoffjungen.“(S.29)「雇われる」, „Der Pfaff dingt ihn für ein Knecht, [...]“(S.33)「雇う」。
- 7) „[...] dan er dem becken für den deick het geben.“ となっている版もある。Volksbücher des 16. Jahrhunderts. Eulenspiegel. Faust. Schilbbürger. Hrsg. von Felix Bobertag. Stuttgart 1873. (Kürschner, Deutsche National-Litteratur Bd.25) S.42.
- 8) „uff meinem laden [...]“ Volksbücher des 16. Jahrhunderts. S.42. また、次のような現代語訳をつけているものもある。„Eulen und Meerkatzen dienen mir nicht für meinen Laden.“ Steiner, G.: Ein kurzweilig Lesen von Till Eulenspiegel. Berlin 1955. S.80.
- 9) Volksbücher des 16. Jahrhunderts. S.37 では4格の „den doctor“ が用いられている。
- 10) 大島浩英：「初期新高ドイツ語における Präfix の用法について」ドイツ文学語学研究36号（関西学院大学文学部ドイツ文学科研究室）1995. S.39f.
- 11) Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S.391, 394.
- 12) 橋本文夫：「詳解ドイツ大文法」三修社 1956. S.373.
- 13) Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. S.416.
- 14) Sie kam in das Zimmer gerannt. — *She came running into the room.* / Sie kam lachend in das Zimmer. — *She came laughing into the room.* この例のように、英語ではいずれも現在分詞で表されている副詞が、ドイツ語では、運動の方法を示す動詞の場合 gerannt のように過去分詞となって区別されている。(三好助三郎：「新独英比較文法」郁文堂 1977. S.276) 従って, geritten kommen, getanzt kommen などともこれと同様の表現であると言えるのだが, Duden-Grammatik (5.Aufl. Mannheim 1995) には, 非完結の継続性を示す現在分詞の例として „Er kam tanzend herein.“(S.187), „Sie kam tanzend ins Zimmer.“ (S.189) などの例が挙げられており, 「kommen+運動を表す現在分詞」という用法もあり得ることが示されている。

上記以外の参考文献

Baufeld, C. : Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.

Götze, A. : Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.

Koller, E. /Wegstein, W. /Wolf, N.R. : Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.

Lexer, M. : Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.

Paul, H. : Deutsches Wörterbuch. 9. Aufl. Tübingen 1992.

阿部謹也 (訳) : 「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」 岩波書店 1990.

工藤康弘・藤代幸一 : 「初期新高ドイツ語」 大学書林 1992.

G. ヘルビヒ・J. ブッシャ (在間進 訳) : 「現代ドイツ文法」 三修社 1982.